

気温、降水量ともにほとんどおなじであったようだ。地球全体の合計がいぜん
と変わらないことをかんがえあわせると結局のところ、この一週間の異常気象
は、今までの（変な言い方だが）降水量、太陽からのエネルギーを各地域に配
分するシステムが、壊れてしまったためにおこったのではないだろうか。原因
は相変わらず不明。

朝起きると、真っ暗だった。今何時なんだ。そう思いながらベッドの横においてある時計に手を伸ばした。しかし、手に触れたのは何か硬いものだった。あたりを探ってみるが時計は見つからない。しかたなく、とりあえず起き上がろうとするが頭が何かにあたり起き上がることができない。おかしい、いつもの自分の部屋ではない。昨日を思い出すが、いつもどおり自分の部屋で寝たはずだ。寝ぼけながらも、とりあえず自分の周りがどうなっているか探ってみることにした。上を探ってみると、かたいものに手が触れ、それは自分の真上を斜めに覆っている。寝返りをうってベッドの端まで移動し床を手で探ってみる。細かい石のようなものが散乱している。完全に目が覚め、ある仮説が思いついた。「地震が起きたのではないだろうか。」そう考えると納得がいく。やれやれ。そのうち救助が来るだろう。もう一度自分の周囲を、崩れないように探ってみる。自分の上に倒れかかってきているものは、本棚みたいだ。足のほうはよくわからないが、足を上げると何かにぶつかる。脚は完全には伸ばすことができない。左側には壁があり、右側は本棚があるが、少しは手を伸ばすことができる。這い出せるような隙間はないみたいだ。床に時計が落ちていないか探ってみると、時計の代わりに崩れた天井らしき瓦礫の間にダンボールに入ったビールを見つけた。どうしようもないので、ダンボールからビールを取り出し飲んだ。冷えていなかったが、のどが渴いていたのですぐに飲んでしまった。するとまた眠くなってきたので、寝ることにした。すぐに救助が来るだろう。テレビで救助犬が瓦礫に埋もれた人を発見するのを見たことがあったな。考えているうちに眠りについた。

目が覚めた。トイレに行きたくなかったが行けるわけないので、寝返りを打ち、ベッドから床に小便をした。声を出して助けを呼んでみた。返事どころか音すらも聞こえない。声を出したら、のどが渴いた。またビールを取り出し飲む。ビールはダンボールいっぱいにあるので、何本も飲んだ。酔いが回ってきてそのまま寝てしまった。

目が覚めた。ビールで水分は取れるから、もうしばらくはここに閉じ込められていてもなんとかなるだろう。腹が減ったが食べるものはない。自力で脱出することは周りが崩れてしまうかもしれず危険なので、救助を待つしかないだろう。声を出して助けを求めてみるが、反応はない。もう一度あたりを探ってみるが最初のとくと変わった様子はない。倒れた本棚をちょっと押してみたが、動きそうにない。人の声が聞こえたら助けを求めようと思い、起きて待つことにした。時々ビールを飲んだ。いくら待っても音すら聞こえない。暗闇と静寂のせいで、自分が起きているという実感が薄れてきた。そのまま寝てし

まった。

目が覚めた。またビールを飲んだ。救助はいつ来るのだろう。そのまま横になりながら起きていたが、ぼーっとしていた。いつのまにか寝ていた。

目が覚めた。あたりは静かなままである。横になりながら救助を待つ。ベッドの上で寝返りを打ち、丸くなっているうちに、足があったほうに頭がきていた。上のほうには崩れた天井らしきものがあるみたいだ。瓦礫をひとつどかすと上に乗っていた瓦礫が崩れ、砂みtainなものがいっしょに大量に落ちてきた。崩れてきたものをベッドから床に落とす。上のほうに光が見えた。また瓦礫をどかすと隙間は大きくなってきたので、ひたすら瓦礫をどかしつづけた。隙間は徐々に大きくなり、人が通れそうな位の大きさになった。光のほうへ近づこうと隙間を登り、外に出た。あたりは薄暗かった。空には一面に厚い雲がかかっている、雪らしきものが降っている。周囲を見渡してみるが、建物がまったく無く、真っ白な地面がどこまでも永遠に続いているように思えた。人の姿も見えない。歩いてみる。景色は変わらず、白い台地が果てしなく続いている。長い間歩きつづけた。どこまで歩いても変わることはなかった。疲れて地面に横になった。空からは白いものが降り続けている。それはぼくの上に降り積もり、ぼくの体は覆われ、地面に埋もれていった。地面は再び、永遠に続く真っ白に戻った。

18日 日曜日

今日はいつもより1時間早起きして家の周りを散歩した。そのあと、たまには朝食を自分で作ろうかと思って卵と野菜を買って帰った。昼ちょっと外出したあと、水曜日提出のレポートを書いたりしていた。早く起きたこと以外普段通りの日曜だった。

19日 月曜日

昨日自分で朝食を作ったせい、今日もまた自分で作る気になった。今日は昨日より少し手をかけてみた。朝刊を読むとまた警官の不祥事が三面記事を賑わせている。犯罪を取り締まるべき警官が犯罪を犯すとは、何かが間違っている。2限から学校に行く。いつもきっかり時間通りに講義を始める教官が今日は珍しく10分ほど遅れた。今日もおおむねいつも通りの一日が過ぎていく。

20日 火曜日

朝起きてボーッとしているうちに今日もまた朝食を作ってしまった。どうやって作ったのかよく覚えていない。しかも、妙においしい。このくらいなら街の定食屋で出せるかもしれない。自分はこんなに料理がうまかっただろうか。今日は少し朝刊が届くのが遅いようだ。その朝刊には、また他の県の警官が組織犯罪に手を貸していたという記事が載っている。これは魔が差したなどというレベルではない。学校に行くと、どの教室でも教官が大幅に遅れているようだ。自然休講扱いで学生が次々と出て行く教室もある。必修の授業に見慣れない顔が数人いた。クラスの誰かの友達だろうか。家に帰って夕食を食べるが、いつもと違って朝からしっかり食べたせい、少々胃がもたれる。お茶漬で軽く済ませた。

21日 水曜日

また朝食を作った。今日はもうちょっとした「ディナー」と言ってもいいくらいの豪華さだ。こんな技術を身につけた覚えはない。なぜこんなことができたのだろう。そしてなぜこんなことをしてしまったのだろう。よく覚えていない。作ってしまったものはしょうがないので全部食べる。遅れて届いた今日の朝刊は、東北地方で起こった警官による大量殺人を報じている。拳銃を街で乱射したらしい。狂っているとしか思えない。学校に行ったのだが、今日は教官が来ない。1時間近く来ないのだが、誰も騒がない。教室を出て行く学生も数人いるようだが、ほとんどは黙って座っている。不思議に思い教室に残っていると終了5分くらい前になって教官が来た。詫びも言わず平然と講義を始め、5分だけしゃべって帰っていった。みんな平然としている。何か事前に連絡で

もあったのだろうか。しかも知らない人間が多い。交換学生だろうか。今日はさすがに昼食を食べる気にはなれなかったので、夕方には少々腹が減っていた。今日もお茶漬けで済ませる。

22日 木曜日

目まいがするようだ。朝気づくと目の前にたくさんの皿が並んでいる。これはもうフルコースと言ってもいい。なんだかもう訳がわからないが、とりあえず全部食べる。食べ終わるころにはもう昼前になっている。今朝刊が届いたようだ。警官がストを起こしたらしい。職務の性質上許されないと思うのだが…。学校に行くと、どの授業も教官が来ない。昨日のように最後のほうで来るのかと思ったら、結局最後まで来なかった。しかし学生は誰も帰らない。そう言えばクラスの間があまりいないようだ。みんなどこへ行っているのだろう。帰ってテレビをつけると、案の定全国で犯罪が多発しているようだ。きっと警官もすぐストをやめるだろう。今日はもう何も食べる気になれない。もう寝ることにする。何かがゆらいでいる。

23日 金曜日

部屋中が皿で埋めつくされている。いったいうちのどこにこんなに食材があったというのか。見るだけで満腹になってしまったので、とりあえず食べられるだけ食べた。どうせ教官は来ないのだろうが、ひとまず様子を見に学校へ行ってみる。学生が学生を教えていた。教壇に立っているのが学生だというのを除けば全く普通の授業風景だ。普通すぎて不気味だ。平然と授業を受けている学生達の中に知った顔は一人もない。本当にここは東大なのだろうか。頭が痛くなってきたので帰る。夕方朝刊が届いた。警官が徒党を組んで暴れているらしい。いつのまにこんなに腐っていたのか。ここも危ないかもしれない。戸締りを確認し、雨戸を閉めて寝る。

24日 土曜日

うちの隅から隅まで料理だ。気が遠くなる。食べたいだけ食べてまた寝た。雨戸を閉めているので昼夜の感覚がよくわからない。朝刊は届かない。夜テレビをつけると、警官が暴動を起こしたらしい。もう何も信じられない。ここが以前と同じ世界だとはとても思えない。いつからこうなった。どこかで何か狂ったのだ。明日は何が起きるのだろうか。

一日目

世界中で数件の凶悪な殺人がおきた。その殺人事件は被害者の友達が犯人であり、報道されたニュースを見た人々は、「自分も殺される可能性があるのでは？」という不安に駆られ、信頼を置いていた人に猜疑心を持つ。

二日目

今日もまた、世界のどこかで殺人事件が起きている。会社は不況のあおりを受けて、リストラをすることになった。社員は誰であろうと自分が首を切られないように、友人、知人関係なく蹴落とすようになる。

三日目

今日もまた、世界のどこかで殺人事件がおきている。その殺人事件は、親が子を殺したり、子が親を殺すというものだった。それがマスコミに報道され、それを見た人々は、円満な家庭内に恐ろしさを感じるようになる。

四日目、五日目、六日目

同様に殺人事件がおきる。

七日目

人々は自分以外の人に猜疑心を持ち、自分しか信じられなくなる。このようにして、ひとは、人間ではなくなり、人一人として生きていくようになる。

ある日のことだった。赤い流れ星がひとすじ夜の空にスッと現れ、そして消えた。夜遅くの出来事だったため、恐らく誰も気づかなかったに違いない。

消えたように見えた流れ星だったが、その一部は燃え尽きず地上に届いていた。突然、鋭い音とともにそれは割れた。そして、中から一粒の種子が現れたかと思うと、みるみるうちに成長し、一輪の本当にかわいらしいピンク色の花を咲かせたのだった。

「今日午後六時頃、新宿三丁目で、若者の集団が老人一人に襲撃され暴行されるとい、いわゆる若者狩りが発生しました。二人が重傷、五人が軽傷を負ったという事です。犯人はバイクで逃走しており、警察では現在行方を追っています。」(十二月七日(土))

「仏政府は昨日、「国内の美術館をすべて壊し、その跡地にマクドナルドを建設する。」と発表しました。仏大統領は日本のことわざを引用し、「衣食足りて礼節を知るという言葉がある。我々はさらなる食生活の向上を目指していかねばならない。」と答弁したという事です。(十二月八日(日))

「たった今衆議院で、「日本人は皆クリスチャンネームを付けねばならない。」という「日本人皆クリスチャンネーム法案」が賛成多数により可決されました。有効投票数300に対し、賛成290、反対7、その他3という結果でした。これでまた一つ国民の希望に沿った法案が通った事になり、国民はその迅速な対応に狂喜しています。」(十二月九日(月))

「EUでは現在、男女差別に関する議論が沸騰中です。双方ともに自分達こそ差別されるべきだと主張しており、容易に結論は出そうにありません。男性側は、「我々は歴史上ずっと女性達を差別してきた。今こそその立場を交代し、女性の独裁政治を行うべきだ。」と主張し、それに対し女性側は、「同じ人間とは言っても、男女間の差はやはりある。聖書によれば、イブはアダム肋骨から作られた。歴史が語るとおり、女性は差別されるべきなのだ。」と反論しています。」(十二月十日(火))

「米国内では、「殺人、強盗、恐喝などどんな罪を犯しても、一枚100\$の免罪符を買えば、その人は無罪放免となる。」という内容の法律が昨日から施行されました。大方の米国民はこの法律に好感を持っています。米政府は、「ここから得る財政収入を元にして、国内の財政赤字を立て直し、さらに軍備の増強に当てる。」としています。」(十二月十一日(水))

「あまりの人口の多さに業を煮やした中国政府は昨日未明、政府軍を国内各

地に派遣して国民の大量虐殺を開始しました。国連も、「人口増加は地球規模の難問題であり、中国政府の決定もやむを得ないだろう。」と行動を認める声明を発表しました。」(十二月十二日(木))

「米政府とロシア政府は今日未明、「お互いの水爆ミサイルの性能を比較検討し競い合うため、核実験を行う。」と発表しました。核実験は今日午後四時から行われ、双方からミサイルを発射して太平洋上で衝突させ、どちらの威力が優れているか決定する事になっています。両国とも自国の勝利を確信しており、目が離せません。世界各国は核ブームに沸き、どちらが勝つか賭けの対象となっています。なお、このミサイルは両方とも世界最高水準のものであり、衝突後の地球は一瞬にして」(十二月十三日(金))

地上に咲いた一輪の花。かわいい顔して人を狂わす、その花言葉は混沌(カオス)

一日目

今日は日曜日。これからまた新たな一週間が始まるというのにどうも気分が落ち着かない。熱もあるようだ。授業の予習もせずに、休日が終わる。

二日目

朝の電車が妙に速い。あっという間に大学についてしまう。かと思えば、大学構内を歩くのに時間がかかってしんどい。ものを食べるのも億劫だ。

三日目

一日の時の流れが、不規則なのに気づく。また、最近妙にマスク姿の人が多。僕自身も風邪気味だ。しかるに病院は空いている。みんな病気でも平気なのか？

四日目

とある一年生が体育の授業中に死んだらしい。みんなが驚かないのが腑に落ちない。最近家に帰ってから次の日の朝を向かえるまでが非常に短く感じられる。授業時間は最高に長いのに。余りに長くて、時が逆回りに流れているように感じられる。(何度も同じ事を繰り返しているような教官の声)

五日目

政府が「健康な人が病気になれるような」政策を発表するという。この国全体が健康体を疎んでいるようだ。なぜだ？時の流れが不規則なのは相変わらずだ。帰りの電車はなかなか進まない。ふと気が付くと、同じところをまた走っているではないか。これでは仕方がない。

六日目

今日はついに見てしまった。死んだはずの僕の友人を。最近時の流れ方が不規則だと思っていたが、これは時のうねりが余りに大きすぎるためらしいことが分かった。その流れが途切れたために、過去が見えてしまったのか？ 大学は、病人だらけでさながら野戦病院のような有り様になってしまった。健康な人など数えるほどにしかないだろう。

七日目

今日は土曜日でお休みだ。と思うのもつかの間、あっという間に次の週になってしまった。神様は、土日がお嫌いのように。時のうねりは我々に冷たい。気が付けば、いつのまにか僕は過去に連れ戻されていた。今日は、1999年2月の22日！何と明日は入試ではないか！また入試を受けるかと思うとうんざり

するが、その前にはまた現在に戻るだろう。しかし、現在って本当は何なんだろう？（1秒先は未来で、1秒前は過去ではないのか?）

月曜日。いつものように朝起きて、学校に行った。いつもなら自分の所属しているテニスサークルに行って授業はずっとさぼるのだが、もうすぐテストの嵐がやってくる。テニスをしている場合じゃない。だが、授業に出つつも教官が何を言ってるのかさっぱりわからない。どうもさぼっている間にかなり進んだらしい。こんな授業は出ていてもしょうがないということで、途中退出してやはり自分に正直にテニスコートに直行。やっぱりテニスは楽しい。興味のわからない授業とは比べ物にならない。結局この日はもうすぐテストだということに授業に全然出ることなくテニスをやりつづけ、終わったのは夜の9時。いったい僕は何をしているのだろうか…。この後はいつもの僕のパターン。こたつに入ってテレビを見て、眠くなってそのままこたつで朝まで眠りつづけてしまった。今日の勉強時間0時間。

火曜日。早く寝てしまったということと、こたつで寝ると眠りが浅くなるということから、朝早く(6時半)に勝手に目が覚めた。最近こたつのおかげで早寝早起きだ。そういうわけで、朝御飯を食べて、テニスの朝練に向かう。いつも8時から朝練だ。で、寒い中朝練をする。そして9時。1時間目が始まる時間だ。そろそろ形だけでも勉強しようとしなければならないと思う。だから、名残惜しくコートを去り、1時間目の授業に向かう。1時間目は計算機プログラミングの授業だ。授業ではJavaを勉強しているのだが、さっぱりわからない。クラス? いったい何のことだか…。結局何もわからないまま1時間目が終了。もうちょっと初心者にもわかりやすい授業をしてもらいたいものだ、と怒りつつ、2時間目は授業がないのでちょっと早めに昼食を食べに学食へ。食べながら3、5時間目はいつも授業に出ていないやつだ、4時間目は休みだ、と気づき、昼食の後は情報棟にメールを読みに行く。ついでに友達の家ページなんかを見たりして暇な時間をつぶす(図書館に勉強しに行けばいいのに…)。その後、テニスコートに友達がいないか見に行ってみる。いた! やっぱりいた! 僕と同じような友達が。こうして今日も昼間からテニスをする。結局この日も9時までテニス。その後は…。いつもと同じくこたつでいつのまにか就寝。明日は英語のテストがあるというのに…。

水曜日。今日も火曜日と同じく8時から朝練…といきたいところだが、今日は英語のテスト。全く勉強していない。さすがにやばいと思い、朝から訳本を読みふける。行かなくてはならないぎりぎりの時間になんとか読み終わり、学校へ向かう。しかし、肝心のレポートを書くのを忘れてしまった。テスト前に急いで書くが、間に合わない。そしてテストに突入。訳本を読んだおかげか、なんとか半分はわかりそうな予感。テストが終了し、先のレポート

を急いで書くがやっぱり間に合わない。頭がおかしくなるくらい、急いだのだが…。仕方なく、途中で不完全なまま出してしまった。これでいいのだろうか…。2時間目はドイツ語。必修で出席をとるのでこれは出なくてはならない。しかし、授業内容はさっぱりわからなく、先生がなんのことを説明しているのかもわからない。これは文法をやり直さなくては…と思いつつ、眠たくなって寝てしまう。起きてみるとちょうど授業は終了。3時間目は休み。しかし、5時間目の宇宙科学IIのレポート作成のため、昼食も食わずに情報棟へ向かう。4時間目が始まるまでなんとかがんばり、終わらせることができた。しかし、その内容の如何は僕の知るところではない。4時間目はこれまた必修の量子化学だ。さすがにこれも出なくてはならない。僕はこの科目のシケ対だというのにまったく理解していない。最初のころはちょっとわかることもあったが、今は全く…。やはり先生の言っていることがわからなく、例のとおり、夢の中へ…。そして4時間目も終わり、次は5時間目の宇宙科学IIだ。1学期に宇宙科学Iも取っていたのだが、それはさっぱりわからなかった。難しすぎたのだ。今回はということで、さらに難しくなるのでは…と危惧しつつあった科目だったが、今回は意外にもわかりやすかった。最初の古典の話のところではどうなることかと思ったが、最近はなかなかわかりやすく、おもしろかった。今日はその宇宙科学IIのテストだ。持ち込みが可ということなので、なんとか調べまくり、無事(?)に終えることができた。まあ、可もなく不可もなく、と言ったところか。その後、学食に夕食を食べに行き、すぐにコートに向かい、テニスをする。今日のテストの憂さ晴らしを思う存分する。やっぱりこの日も9時までテニス。まあ、今日は2つもテストがあったしいいだろう、と自分を甘やかす。たしかに2つテストは終わったが、来週もっと悲惨なテスト達が残っているというのにも気づかずに…。どうやら僕の眼中にはテニスしかないようだ。この日もやっぱりそのまま就寝…。

木曜日。この日はいつもなら英語、実験など大変な授業が多いのだが、もう英語も実験も終わってしまった。つまり今日の授業はないのだ。こんな日は朝から図書館にこもって1日中勉強…といきたいところだが、残念ながら僕にはそんな思考回路が存在していなかった。やっぱりこの日も一日中テニスに打ち込むのであった。明らかに現実逃避であろう。

金曜日。今日もいつものとおり朝練に。1時間目は必修の物理だが、出てさっぱりわからないので、今ではあきらめて朝練を続けている。だからこの日は2時間目の体育にコートを追いつかれるまでテニス。2時間目は授業があるのだが、大して出て意味がないので、出ずに友達と学食へ。そこで昼休みが終わるまで談話。3時間目はドイツ語の会話があるのだが、なんとなく出る気が起こらないので出ないで友達とともに、テニスコートが空いていないかを

見に行く。ハードコートは体育で使っているが、クレーコートは空いていたので友達と喜んでテニスをする。コートが結構空いていたので、試合なんかもしてみた。4時間目は体育の先生に許しをもらい、授業に混ぜてもらった。話のわかるいい先生だ。で、4時間目も続けてテニスをして、5時間目は出席を取る授業があったので、テニスをやめて授業に出た。もう疲れた…というのもあるのだが。5時間目の授業はなにやら哲学的な授業で、言葉についていろいろ先生が語っているのだが、いまいち複雑でよくわからない。それでも理系ながら文系科目は理系科目より得意だというのに…。授業が終わると、学食へ夕食を食べに行き、すぐに家に帰った。やはり昼間のテニスがこたえたのか、今日もすぐに就寝。

土曜日。休みだというのにこの日もいつもと同じくテニスへ。昼までテニスをして、昼食を食べて、情報棟へ直行。ホームページを見たり、メールを書いたりしていたら、いつのまにか5時になっていた。いったい勉強もせずに何をしているのか…。さすがに家に帰り、買い物に行き、夕食を食べる。今日はスパゲッティだ。3、4人分はいつも一挙に食べてしまう。お腹いっぱいになれば睡眠…。で、夜の11時ごろに友達からの電話で目が覚める。そしてインターネットに接続して友達とチャット。まったく平和というかなんというか…。自分の落ち着き具合に改めて感心する。夜2時。さすがにやばいと思ったのか、月曜日のテストの科目の教科書をこたつのテーブルの上に広げる。改めて見てみると膨大な量だ。いったい僕は今まで何をしていたのだろうか…と悩む。そしてついに勉強開始。追い詰められないと動かないのは僕の困った性格であり、そのために今まで苦労させられてきた。そしてどうやら今回も…。勉強開始から1時間。なんだか疲れてきた。伸びをするため、横なってみる。やっぱり気持ちいい。そのまま1、2分ほど横になって…。

日曜日。目が覚めるともう外は明るい。しかもかなり。時計を見れば10時。結局横になって寝てしまったのだ。横になったことを後悔しつつ、朝ご飯を用意し、食べる。なんだかぼーっとしている。ふと我に返り、このままではいけないことを再確認し、図書館に行って勉強することを決意。早速図書館に行き、2Fで勉強することにした。だが、コンピュータのことも気になり、ちょっとだけだと自分に言い聞かせ、メール、ホームページをいつものように見てみる。1時間ほど見た後、2Fに戻り、勉強に専念。勉強、居眠り、勉強、居眠り…を繰り返し、閉館の6時になった。家に帰り、買い物に行き、夕食を食べる。もう時間がないのでこの日はできたものを買って食べた。そして勉強…。2時間ほどするとやはり眠たくなってきた。寝てはいけないと思い、部屋を動き回る。またこたつに入って勉強する。そして11時。気分転換のために、勉強とは関係のない本を本棚から取りだし、読んでみる。それでもやっぱり眠た

くなってきた。横になってはいけないいけない… と思いながらも、ちょっとだけなら大丈夫だ、片方で思い、横になった。やっぱり横になるのは快感だ。そして…。

ついに月曜日の朝になってしまった。結局勉強はほとんど進んでいない。今日から山のような大事なテストが続くというのに…。僕の目の前は真っ暗になった。僕の精神はどこか別の世界へ飛んでいったようだった。このようにして僕の描いていたビジョンは音を立てて崩れ去っていったのだった…。

月曜日

目を覚ますと時計の針は12時15分を指していた。慌ててベッドから飛び起きる。その数秒後に外の景色を見てようやく事態を把握した。なんのことはない、掛け時計を6時間ずらしているだけだ。大学入学の頃から、別の言葉で言えば一人暮らしを始めた頃からこれが習慣になっている。とくに理由なんてないし、バカらしいと言えばバカらしい。今日はたいした出来事もなく、普通に大学に通い、普通にサークルに出て、普通に帰ってきた。

火曜日

今日も例の日課から始まった。慌てておきたのは12時。(実際には6時なのだが。)今日も寒そうだ。別段変わったことのない一日だった。まあ、電車のダイヤが乱れていたりしたはしたが。

水曜日

いつもと同じ、慌てておきる朝。今日も12時に起きた。外は昨日より明るい気がする。これから段々日が長くなっていくのだと感じ、すこしうれしくなった。今日もなんてことはない1日。でもひとつミスをしてしまった。家庭教師に遅れて行ってしまったのだ。いつもなら5限に宇宙科学の授業を受け、そのまま向かえば間に合うのに、今日はなぜか遅刻。いまいち臍に落ちないが、家庭教師先でもあまり気にしていなかったのによしとしよう。

木曜日

いつものように12時に飛び起きる。だが、今日はいつもと違っていた。冬にしては外が異様に明るいのだ。時計が止まったのかと思い、時報で確認するがそんな様子もない。秒針までぴったり一致していた。首をかしげながらテレビをつけると、おかしい様子が目に入ってきた。朝だというのにサザエさんをやっている。ラジオでは大相撲の中継が流れていた。頭が痛くなり、そのまま布団にもぐりこむ。風邪でも引いたのだろうか。今日は実験の日だがそんなことはどうでもよかった。そのまま深い眠りに落ちた。

金曜日

起きたのは12時。外は西日が差していた。必死に考えるがよくわからない。一体どうなっているのだろうか。だが、よく考えれば簡単なことだった。半日寝過ごしてしまったのだ。大学の授業があるので全然大丈夫ではないが、それでも胸のつかえがとれた気がした。食べ物がなくなったので近くのコンビニへ買いに行く。その途中で愕然とした。PHSの表示は10時30分…さっきより前に戻っている。時報にかけてみたがつかない。気づくと街じゅうが異様な雰

困気だった。ひとびとは意味のわからない動きをし、車が同じところを行ったり来たりしている。

もういやになって家へ帰り、布団をかぶって寝てしまった。

土曜日

12時に起きてしまった。もうイヤだ。またわけがわからないことばかりに違いない。それでも冷静に状況を把握しようと努める。落ち着こうとコーヒーを飲み、考えてみた。考えられる結論は…

「時間の方向性」の欠如だった。

そう考えればすべて納得がいく。この世界で今、確かな方向性を持って流れている時間は、僕と部屋の掛け時計だけなのだろう。掛け時計だけは何があってもしっかり1秒1秒を刻んでいた。そう気づいた瞬間、周りのものが不可解な動きを示し始めた。散らかっていた部屋がかってに片付き、エアコンは空気を吸い込んでいる。すべてが逆向きかといえそうでもない。いろいろなものが時間の正しい向きと間違った向きを繰り返している。きっと外も…下手をすれば核爆弾なんかが飛んでくるかもしれない。だが、そうなったとしても時間が逆行すれば何もなかったことになる。考えてみれば、僕の時間の方向性も実は正しいと思っているだけなのかもしれない。他の時間の方向性と一致していると言う保証はどこにもない。時間の方向性に絶対性はないのか。「一晩中」僕は考えつづけた。

日曜日

…もう、この日曜日と言う定義も役に立たないのだろう。「時間」が完全な混沌となった今、生きる気力を失った僕は同じ時間を共有する掛け時計と共に…

[2月9日・水曜日]

俺の同級生、祐介がこんなことを言いだした。

「一週間で世界を壊せるとしたらどうしたらいいんだろうな」

…いつものことだ。俺は知ってる。祐介は授業中にいろんな想像をして楽しんでるんだ。宇宙人が地球に攻めてきてそれを祐介と祐介の友達で救う、というような想像、祐介の好きな人しか世界からいなくなってしまうとどうなるか、というような想像。そして、今こいつが言ったような想像。こいつの妄想癖も困ったもんだよ。

「そんなもの、アメリカ大統領を殺して核のボタン押したらおしまいじゃん」

誰かがこんな事を言い出した。…まったく…。相手にするなよ。だが、祐介が相手にする前にみんなを止めておかないと、俺が何か言われるから止めることにした。俺が祐介の友達だと思われているだけに、俺が話しに加わってなくても妖しい奴らと思われてクラスの奴らに白い目で見られてしまうことすらあるのだ。仕方なく…

「ダメだな。つまらん。『一週間』もかける必要なんてないじゃないか」

ツッコミをいれてやる。お～、お～、静かになった。お題を出した祐介までもが、

「1日で終わるよ、それだったら」

と同調する。そうだ、そうだ。それで終われ。そして俺は平和な昼休みを…

「やっぱりスコップとロープと軍手を使うとか、そういう変わった設定じゃないと面白くないんじゃないかな」「そうそう！例えば、軍手を手にはめてスコップで地面を掘っていたら、謎の罅穴があったから紐をたらしてみたら、実はそこが遺跡だったりして、世にも恐ろしい物体を吊り上げてしまう、とか」…だから、俺は平和な昼休みを送りたいんだって！

「…つまらん。どっかの映画でありそうだ。そんなくらいなら」

すかさずとツッコミをいれてやる。お～、お～、今度も静かになったぞ。よし、今度こそ、平凡でささやかな昼休みを…

「夢オチだったらいくらでもできるのにな」

…おいおい。ならば…

「…どっかのゲームじゃねーか。それなら。言っておくが、ラストに、『だったらボクの最後の願いは…』…とかいって世界が救われる、っていうのは当然却下だからな」「いや、夢の中なら奇跡も思いのままだ」「だーっ、『起きないから、奇跡って言うんですよ』という名言を知らんのか！」「…どこの名言なんだよ」

むかつ！

「そんな事言う人、嫌いです」

思わず、とあるゲームの口調を真似て言ってしまう。いかんいかん、乗ってしまった。

「お前、そうやってすぐにゲームのネタを出すから、クラスのやつに濃い奴だと思われるんだよ」

側にいた北川にちゃちゃをいれられる。

「放っとけ！」

やかましいわい。まったく。

「だったらさあ…」

いいかげんにしろ。

「だったらゲームオチ」「やめい！夢オチと変わらん！」「それならば主人公が大学生になったT●Heart！当然、委員長は東大入ってシケ長やってんの！ああ、いいんちょ萌え～！大阪出身のシケ長…もう関西弁で仕切って、やる気満々って感じだ～…」

……それをいうなら神戸出身です。だいたい、関西弁のシケ長なら理科2・3類4組にだって……

「な、なんだったんだ、今のつぶやき声みたいなやつ…」

俺はどこぞともなく、陰謀的に聞こえてきた声に驚く。だが、他の奴らは相変わらず自分の世界に浸っている。

「あ、綾香さ～ん！萌え萌え～！」「いや、僕は志保ちゃんがいいと思うな…」「…だから夢オチはやめれ、つったろーが！しかもお前ら、妖しいゲームの世界に入るな～。ただの変な人だぞ～っ！」

…全く困った奴らだ。…こんな奴と友達としての付き合いがあるから勘違いされるんだな。だったら、他の奴と仲良くしてた方がいいかもな。

「…浩平君は琴音ちゃんなんだよね」「当然（きっぱり）」

あ。思わず本音、魂の叫びが出てしま…い、いや、思わずネタが口をついて出たんだ！そ、そう、本音じゃない…。きっとだ。いや、絶対だ！た、多分。今、思わずオタクな会話を交わしそうになったけど…。…結局、こうやって本来の議題を忘れた妖しいゲームのネタ話大会は昼休みが終わるまで終わることはなかった。

…あううう～、俺の平凡でささやかな高校生活を返せ～っ！

「お前が悪い」「放っとけ！」「だいたいその『あううう～』ってのはT●Heartのマルチの…」「…違う。『こ〇パ』の千紗だ」

…また周りの奴から白い目でみられてる…。自分で墓穴を掘り、なおかつそれを「策略だ謀略だ」と叫びつつ自分でその穴にはまるような、まるでそんな感覚だ…。

でも、これがいつもいつも変わらない日常。こういう日がいつまでもいつまでも、続くものだと思っていた…。

[2月10日・木曜日]

カシャアツ！

耳障りな音と共に視界が白くなる。白いというより何か痛いような感じがする。…とにかくまぶしい。

声がする。「ほら～、さっさと起きなさい！もう朝だよっ！」

…そうか、朝だったんだ。だったらまぶしいよな…。…………。…………。眠い。自慢じゃないが、俺は朝には弱い。起こされなければ目が醒めたら昼なんて事は当然だ。一回、起きたら寝た日の次の朝の、さらに翌日の午後7時だった、なんてこともある。当然、すぐに起きることなんて絶対にできるわけがない。起きるわけにはいかないんだ。

…そう。こうやって考えて寝ているのが何よりの快感なんだ。本来起きなくてはいけないのだけれど、やっぱり人間の欲望には正直に、寝る！この快感こそ、生きていてもっとも眠りを意識できる素晴らしい時間ではないか。

…。…………。ぐーっ。

…………。…………。

ガバアツ！今度は体が軽くなった。そして、なんかすーすーする。ていうより、寒い。マジで寒い。うーっ、このままじゃ凍死する。南極にいる越冬隊員の気分だ。…というか…布団だ。布団がない。布団がふっとんだ…。…。…………。つもらん。

また声がした。

「ほらぁ～！つもらないだじゃれ言っていないで起きなさいよ～！」

…。くそお、負けるわけにはいかんっ！…でも、寒い。寒いが起きるわけにはいかない。体を丸くして逃げる体温を守ろうとする。…まだ眠れる。眠い。そうだ、眠いんだ。眠い時は人間寝ないと死んじゃうんだぞ！……たぶん…。

…。…………。…………。ぐーっ。

バフツ！…今度はなんか視界が突然暗くなった。白から黒になったというか…。……それよりなんか息苦しい…。暑い…。

「ぐ、ぐお。…。…………。ぶわぁぁあつ」

俺はやっとのことで、上から押し付けられていた布団をはねのけ、飛び起きる。

「ふう～、やっと起きたね」「ふう、ふう」

しばらく、何も考えることもできずに、息を整えることしかできなかった。…暗くて暑くて息苦しい空間からの開放感に浸る。

しばらくして、やっと落ち着いてきた。そして、目の前に制服を着て立って

いる女の子がいることにも気がついた。

「どわっ! な、なんで、見も知らぬよーな美少女が俺を朝一番に俺を起こしに来るんだっ!」

俺はびっくりして、部屋の壁をよじ登ろうとする。

「…なに言ってるのよ。浩平」

見知らぬ美少女はあきれた顔で開き放たれた窓のそばに行き、

「まだ目が醒めないのなら開けちゃうよ」

なんていう。うっ。こ、これは嫌かもしれん。

「ま、まあ、それはなんていうか、冗談だが。人間はギャグを1日3度は言わなくてはいけないという法律があるんだぞ」

その美少女は無視して窓を開け放ち、そしてベランダから布団を干した。そして…

「どこの法律だよ…」「大阪(断言)」「…」「……」「……………」「……………」「でも浩平には本当にいいお嫁さんを見つけてもらわないと心配だよ」「……だから大阪の法律に……」「そうだね、気の強い子のほうがいいんじゃないかな。強引に引っ張ってくれるような」「……日本から大阪が独立してそんな法律が決まったんだよ……」「ほら、さっさと用意しないと遅刻するよ」

俺を追い出すような感じで言い放つ。

「……うう、む、無視しないで……」

「なんつーか、現実的だな、お前って」「なによ、それ」「いや、べつに、なんとなく」

俺は制服と鞆を片手に部屋を後にした。台所に行ってはみたが誰もいない。秋子さんはもう会社に行っただろう。そうか、秋子さんが玄関にいた俺のことを瑞佳に頼んだんだろう。

「まだ寝てるみたいだから、起こしてあげて」、と。自分で起こせばいいようなものだが、なんていうか、面倒くさがりなんだ。あの人は。めったに俺の部屋には来ない。俺の部屋に他の人が住みついていたって、一向に気付きはしないだろう。どうやら仕事が忙しいらしいんだけど…。秋子さんにとって、家は眠るための場所、というだけの意味しか持たないようだ。家にプライベートというものはどうやら感じていないらしい。

…それはそれで俺は気楽だからいいんだけど。ちゃんと食事の用意はしてくれてるしっ。そして、今日の朝食を見てみると…

「おおっ!今日は納豆ご飯!日本人なら朝は納豆。これは人としての義務だ!」「なに馬鹿なこと言ってるのよ!もう時間がないよ」「な、なぬう!私の命の源、納豆を抜きで生きろというのか!死ねというのか!」

…そんな事を言いつつ、納豆だけは口の中に放りこんだ。んー、満足満足。このねばねばがいいんだよ。しかも納豆は小粒に限る。ひきわり納豆はなんか

食感が悪いし、粒が大きすぎると口の中で嘔み潰す感覚が強すぎる。小粒が一番いいんだ。

「もうっ！本当に時間がないんだよっ！」「待て！あと大きいものを出して顔洗って歯を磨いたら行く！」「…それだと食後3分以内に歯を磨けるのかなあ…」

瑞佳のつまらんツッコミはとりあえず無視。急いで大をして顔を洗いながら歯を磨く。…歯ブラシが邪魔だ。

「もう、本当に走らないと間に合わないよ！」「…し、しまったあっ！朝シャンがまだだっ！」「そんなもの、したことないでしょっ」「一度くらいはやってみてもいいと思うんだよ」「休みの日にしたらいいじゃないの」「別に待ってなくてもいいぞ。先に行ってるよ」「…本当にしたいの？それなら手伝うけど」「いや、さらさらそんなつもりはないが」「………はあ」

…いや、ため息疲れても。俺も中途半端な冗談で遅刻するのもバカらしくなってきた。

「いくか」「もう、遅いよ。ほら、急いで」「時間は？」「はい」

そう言って、俺に時間を見せてくれる。…8時15分。確かに走らないとやばいな。

「だからそう言ってるでしょっ！」

門を飛び出し、そして俺たちは走り出す。速度を緩めることなく、家の前の坂道を駆け下りる。そして、速度を緩めずにそのまま走りつづける。…この時間に交差点を通過できたからあとは歩いてても間に合うだろう。後ろを見ると瑞佳もついてきている。

しかしこういう朝の光景にも慣れてきてしまっているが、よくよく考えれば不思議なものだ。なんていうか、なにか、なにかのきっかけがあって、たくさんの選択肢—いや、むしろ可能性かも知れない—の中から、今に至っている、という感覚がする。だからどこかで違っていたら、ここには至っていなかったのだろう。…いや、至ったほうがむしろ偶然だろうな。ただ、なんとかしていればどこかには至るのだから、そう考えると大したことではないのかもしれないが、でも、じっくり考えてみると不思議だ。

7歳の時に身寄りをなくし、行く先がなくて困っていたところを、叔母の秋子さんが預かってくれることになった。当然、友達なんていない。知ってる人もいない。街行く人が話す言葉さえ知らない。俺は幼くて、しかもそこは異国だったんだ。そこに現れたのがこいつだった。

コンッ！

いつものようになにもすることがなくて、部屋の中でもうこれで37回目になる本を読んでいると、窓ガラスが音を立てた。

コンッ…！

なんだ……？二階だっていうのに…石を投げてぶつけてるとでもいうのしろ

うか？

コンッ…！

また鳴った。

いたずらだろうか…。放っておいたらいつかやむんだろうな。

コンッ！

ところがいくら待とうが一向にやむ様子がない。なんて根気のある奴なんだ。顔だけでも見てやろうと俺は窓を開け放った。すると、

ゴンッ！

バタッ！

何が起こったかわからなかったが、どうやら俺の頭に石が当たってしまったらしい。誰だ、誰がこんなことを！

「うわ、あたっちゃったあ。ごめんね。だいじょうぶ？」

下からそんな声が聞こえてくる。

「だれだ、こんなことをするやつは！なにすんだよ！」

まだズキズキ痛む頭を押さえ、そう怒鳴りつける。

「ごめん。あのさ、あてるつもりはなかったんだよ」

ほぼ真下、塀の外に立つ女の子がそう弁解する。そういえば…同じクラスにこんな女の子がいたっけな。

「すごくいたかったんだからな！」「ごめんなさい！あやまるからっ！」「ごめでゆるしたらけいさついらない！」「ただよんでただけなんだよ。いっしょにあそぼう、っていいただけなんだよ」「うそつけっ！」「うそじゃないもんっ！」「あしたからいじめてやるから、かくごしとけよっ！」「うわーん、うそじゃいのにいい」

それが、後ろを駆けてくる瑞佳だった。あの日以来、俺は瑞佳をいじめつづけた。靴を隠すんじゃなくて靴が増える（他人の靴を下駄箱に入れてやるんだ）とか。必殺！牛乳机とか！牛乳をこぼして真っ白な机にしてやるんだ。あとで机が香ばしい匂いを放つようになるというオマケつきだ。

…今思えば相当悪質なことをしていた気もするが…よくもまあ、今の関係があるものだ。だからこそ、今に至る自分を感慨深く思うのかもしれない。

「浩平！前！」

なんてことを思うのだ。…って、俺が「浩平！前！」なんて事を思うのか？前を振り向く間もなく…

ズドーーーーー！

衝突してしまった…。なんか硬い…。…これ…校門じゃん。…これが女の子だったら良かったのにな…。転校生だとか、ロングヘアでおとなしいどこぞのお嬢様とか。それだったら…

「なにやってるの、浩平！」

いかんいかん。最近、歳を取ったせいか思いもしないことを考えてしまう。これは神の声… そうか、天声かな。新興宗教で足裏診断でもしようか。

「はあ…どうやら間に合ったみたいだね…」

俺が靴を履き替える間に瑞佳が息をついて言う。チャイムが鳴り響く中、教室にダッシュ。何とか担任よりは先に到着することができた。教室の中は騒然としていた。もうすぐホームルームが始まるだけに、瑞佳とはすぐに別れ、俺は窓側の席につく。椅子に座ろうとした瞬間に担任が来た。まったく、つまらんなあ。と、思いきや、担任が今日の伝達事項を黒板に書き出したとたん、教室が色めき立った。

「今日は昨日言ってたとおり午前授業だ。4時間目までしかないぞ。んあー、そういえばこれが一時間目だからあと3時間しか授業がないんだ。お前ら幸せだなー。先生に感謝するようにな」

…そういえばそんなこといった気もする。教師ってのは俺たちの授業料をもらって生活してる人間なんだ、たまには生徒にも還元大サービスしないとばちがあたるからな。当然だ。

「じゃ、ホームルームは終わり」

おいおい、ほとんどなにもしてないが…。うちの担任はおおらかないい奴なんだ。たぶんな。こんなときだけはそうしておこう。

「浩平、今朝は凄かったね。校門に抱き着いている人なんて始めて見たよ」「…俺は『ナダ中学』って学校の校門をなでなでしてる小学生集団を何度となくテレビで見たような…。『驚異！驚愕！お受験をしながら塾で育つとこうなる！？変態小学生の奇行の数々！』ってテレビが最近はやってるだろ？」「そうそう、そうだよ…って違うよっ！……もう…。校門じゃなくて女の子だったら良かったのにね。そうすれば、案外運命の出会いで、そのまま浩平と…」「……お前、他の女と俺をくっつけたがるよなあ…」「何かと浩平の面倒を見てくれる人がいいよね。そうじゃないと心配だもん」

そう言い残して再び去って行く瑞佳。まったくあいつは…。俺の母親気取りだな…。まあ、実際近いもんがあるけど。

そして、つまらない授業が再び始まる。眠たい。授業というのは、眠気を誘うために存在しているようなものだ。教科書というのはいつもいつも同じような内容が続いている一種の催眠状態に陥らせる物体なんだ。そして、教師が

「……主語がない、しゅっごーい、t h a t は主格の関係代名詞！反応がないねえ。飯能、所沢、秩父、じゃありませんよ～。それじゃ解答いきましようか。怪盗ルパーン、じゃありませんよ」

といってる声は日本語訳すると『あなたは眠くなる、あなたは眠くなる～』っていつてるんだ。俺が眠くならない授業なんてあまりない。これだけ寒いギャグを連発している授業でさえ、俺の前では赤子の手をひねるような感じだ。

以前、俺の前の席に座っている七瀬の髪の毛を『眠気防止センサー』に利用したこともあった。髪の毛を手で巻きつけておいて、もし俺が寝たら七瀬が気がついて俺を起こすだろう。そう思ってやってみたが、結局眠ってしまい、あとで七瀬に金属バットで殴られて全治3ヶ月の重症を負った。

「してないわよ、そんなこと！」

いーや、お前ならしそうだ。……寝るか。……。…ぐう。

…次に目が醒めたら、昼だった。そうか、だったらまだあと3時間は眠れるな。おやすみ。

「浩平、今日、昼までってわかってる？もう私も部活に行くよ」

…そういえば、そんなことを担任が言っていた気もする。

「じゃ、部活出てくるわ。帰宅部」「それ、部活じゃない…。私はちゃんとした部活だよっ！」「それじゃな」

教室を出て、靴を履き替える。校門を出るときに運動系部活の様子が垣間見える。まったく、ごくろうさまなこった。俺にはあんな学校で体を痛めつけ、さらにそれから家に帰って勉強するなんてやつのが知れない。俺にはのんびりだらだら過ごすのが性にあってる。だから、帰宅部なんだ。

結局、家に帰ってテレビを見て夕食はいつも通りコンビニ弁当プラスカップラーメンですごくという、非常に健全な夕方を送った。秋子さんは結局日付が変わるまでに帰ってくることはなかった。

床につこうとして考える。…今朝はあんな起こされ方をしたが、なんかそれも癪だから、なんかやっておこう。

20分間の思考の結果、机の下で寝ることに決定。寝にくいけど、今朝みたいに起こされても布団の下に俺はいないのだ。驚く瑞佳が目浮かぶ。これは楽しみだ。……。……………。

[2月11日・金曜日・祝日]

カシヤアツ！

「ほら～っ！起きなさいよ～！」

…。

「あれ……？」

……。

「あ～っ、毛布が丸めて人の形にしてある～っ！」

ぐーっ。

「浩平、どこ～っ!？」

ぐーっ。

「靴はあるし…寝ぼけて学校に言ったって事もなさそうだねえ…」

ぐーっ。

「浩平～っ！」

ぐーっ。

「あーん、どこどこお～？」

がちや。

がばがば。

ごそっ。

「あーっ！いたあーっ！」

ずるずるずるずる。

ん？なんか背中が床に擦れて痛い。

「ほら～、どんな寝相だったら机の下に潜っちゃうのよ～っ！」「いや、びっくりするかな、と思って」「あー、びっくりした！これでいい？」「ま、いいけど…ところで、今日はいつもと趣向が違うな。そんな服装で学校行くのか？」「もう、何寝ぼけてるんだよっ！今日は祝日だから学校は休みだよ」

そういえば。今日って、何の日だったか忘れたけど休日らしい。きょとんとしていると、

「今日はケンコク記念日だから休みなんだよ」

瑞佳が言う。

「ケンコク…圏谷…な、なんて氷河地形なんだ！」

最近地学で習ったばかりの言葉を使ってみる。そういえば地理でも習ったけど。

「建国！『国を建てる』っていう建国だよ！建国記念日は祝日なのっ！」「だったら、なんで瑞佳が俺の家に起こしに来るんだ？」「浩平、明後日の模擬試験のための勉強があるから教えに来い、なんていったじゃないの」

そういえば、そんなこと言ってた気もする。仕方ないなあ。

「じゃ、瑞佳。俺が着替えるからお前は歯を磨いていてくれ」「誰の？」「俺の」「どうしてそんなことまでしてあげなくちゃいけないのよ」「いや、やってくれるかなあ、って思って…」「はあ……。…やっぱり面倒見のいい人が必要だよ。浩平には」「またか…？」「それより、早く勉強しようよ」「ん、ああ…。…………俺の着替えは無視なんだな」

結局、俺は着替えずに勉強を始めることにした。明日の試験は英語、数学、国語と理科1科目、社会1科目。理科を何で受けるかはまだ考えていない。ましてや社会なんて全然決めてない。ギャグで地学を受けてみたら県内1位だった、ってこともありうるし、俺としては地学を選ぶのも魅力を感じる。だが、物理化学選択だしな。

「でも、本当に私を驚かせようとしてあんなことしてたの？」

勉強中、瑞佳に突然そんな事を言われた。

「ああ、それ以外になんであんなところで寝る必要があるっていうんだ」「はあっ…。普段、十分浩平には驚かされているから、あんなことわざわざしなくてもいいよ。だいたい、体とか痛かったんじゃないの?」「いや、別に。俺はどこでも寝られる性格だからな」「その器用さを別のところに使えばいいのに…」「だったらベランダの手すりの上で寝ようか」「わーっ、それは危ないよ。やめようよ」「さすがにそれはしない。俺もまだ死にたくはないからな」「もう。そういうことに気を回すくらいならもっと別の事に気を使えばいいのに」「例えば?」「例え、ほら、いつも起こしてあげているからっ、日頃の感謝を込めてっ、とかっ…」「そうだな、感謝を込めて…プレゼントでもやろうか?」「あっ、わかっているねえ」「そうだなあ、瑞佳には毎朝お世話になっているから…」「うんっ」「入浴剤でも買ってやるか」「そ、そんなの嬉しくないよ〜」「そうか?いつか使うし、疲れが取れて元気になれるぞ」「そりゃそうだけどっ、でも何か形に残るものの方がいいなあ」「だったら猫をやろう」「うんうん」「ネコの剥製をやろう。しかも手作りだ」「はふんっ、残酷過ぎるよお」「だったら水晶細工のネコだ」「あっ、それはかわいいかも」「原材料取って来てやるから瑞佳が自分で細工するんだぞ」「そんなあ、できないよ〜」「だったら、プレゼントはなしだな」「うええ〜」「冗談だ。さて、勉強しようぜ」

早速、リビングの机の上で勉強を始めた。

「さて…それじゃ、数学やるか…。」

こうやって、数学と、英語の勉強で今日一日を費やすこととなった。お昼ご飯を食べるときと、他にときどき短い休憩をはさみはしたが、ほとんどはぶっ通しでやったような感じだ。

「浩平、疲れたね〜っ」「1日勉強してるなんて俺にとっては『死ぬ』といっているのと同じようなものだよ…」「私も似たようなもんだよ…。でも、浩平、私より問題を理解するのが早いよね」「そうか?」「そうだよ…。ただ、浩平はいつも…」「…勉強しないだけ、ってか?」「だから、やればできるんだよ」「ふう…。でも仕方ない…。明日も頼むぜ…」

ふう。長い一日が終わった。俺にとって、勉強1時間はゲーム10時間より大変だ。そんなのだから今日の疲れは尋常じゃない。さっさと寝ることにするぞ。

…と、思ったら。今日は近所で夫婦喧嘩をやっている声が聞こえる。はあ…。もっと静かにやれって…。しかも、こんな夜中に…。

「あなたっ、今晚はどうしてこんなに遅いのっ!」「仕方ねえじゃないかよお、会社の付き合いで飲みだったんだっ!ほら、風呂入るぞっ!準備しろ!」「だったらどうしてワイシャツに口紅がついてるのっ!」「こ、これはだなあ…」

…すごくありきたりな夫婦喧嘩だな、これはまた…。ちょっとくらいバリエーションを持たせたらいいのに。そんなことを考えながら床についた。

[2月12日・土曜日]

カシャアツ!

「ほら、起きなさいよーっ!」「うーん…あと一週間だけ寝させて」「一週間も寝てたら、遅刻しちゃうよっ」

いつも通りの朝…。本当に、こいつは母親気取りだな…。

「ほらあっ!」

がばあっ!

いつもの展開通りシーツを剥ぎ取られる。

「うわあっ!」

がばあっ!

だが、今日は布団が元に戻される。

「浩平…は、裸だよ～～っ!」「ん…?ええっ?」

俺は上体を起こし、シーツの下を覗き込んでみる。一糸纏わぬ素っ裸だった。

「うっ、うわああああっ!瑞佳、おっ、お前っ!」「ご、誤解だよっ!なんにもするわけないよっ!」「じゃあどうして俺は裸なんだっ!?」「知らないってばっ!…布団剥いたら、裸だったんだよっ」「瑞佳、何もこんなことしなくても、俺はだなあ…」「はあっ、冗談言ってる暇があったら早く着替えようよ…。今日も勉強するんだよっ」

そう言って、瑞佳は俺に着替えを手渡した。うーん…さすがというか…。体裁の悪い濡れ衣を着せて、からかってやろうと思っていたが半ばで見破られてしまったらしい。

「いや、瑞佳に俺の生まれたままの姿を見てもらいたかったんだよ」「見たいわけないよ、そんなもの」「そうか、それは残念」

仕方なく、服を着る。さすがに、今日は第2土曜日なので学校は休みだ。今日も明日の模試のための勉強をしなければいけない。はあ、気が重い…。

「まったく…浩平にはいつも驚かされるよ…」「はあ?別に…あんなのライフワークじゃねーか」「ら、ライフワークって…」「まあ、そんなことよりも、せっかくだし、さっそく始めるとするか?」「なにを?」「…………」「…………」「…ふざけんなよ」「ご、ごめんなさい」

そういうわけで、今日も瑞佳と一緒に勉強した。国語と地理を勉強した。理科はどの科目を受けるのか決めていないので、行き当たりばったりだが、とりあえず化学を勉強するか…。

「じゃあ、早速だけど、浩平っ。じゃじゃんっ。問題です!単量体が○○反応を繰り返して高分子になる反応を付加重合という。○○にあてはまる言葉は何?」「反応…飯能、秩父、所沢…じゃあ、ありませんよ～」「何くだらないこと言ってるのよ…」「んっと…付加反応、だったっけ?」「ぴんぼーん。正解で～す。じゃ、次は…ベンゼン環にカルボキシル基と…」

…このようにして、昼ご飯の時に休憩を挟んだ以外、勉強ばかりしてすごした。6時くらいになって、そろそろ勉強をやめようかと思ってきたときに…

「ねえ、浩平。今晚はうちの親が遅くなるっていうから、どこか食事にでもしに行かない?」「おお、構わんぞ。どこに行く?あ、マックはお断りだからな」
…マックじゃなくてマクドだっ!

「あ、あれ?浩平…今、なんか変な声がしなかった?」「う、うん、俺もそんな気が…。疲れてるのかなあ…」「そ、そうだねえ…。あははははは…」「それじゃ、どっか行くか。とりあえず駅前に行こうぜ」「うん」

…そうやって駅前に出てきたが…いい店が無い。マックはよく学校帰りに立ち寄っているし…

……マックじゃないっ、マクドだっ!

…やはり幻聴が聞こえた…。いったい、どうなっているんだ、この世界は。まあ、気にすることでもないか。うーん、だったら…どこにしよう。そういえば、このへんにこないだ入っておいしかったカツ丼屋があったなあ。そこにしようか…。…と、待てよ?そういえば、最近この近所にファミレスができたらしいよなあ。ファミレスは値が張るのでほとんど利用しないが、たまにはいいかもしれない。行ってみっか。

「瑞佳、このへんにファミレスができたんだよな」「うん」「だったらそこに行ってみないか?」「うん、いいよ」

赤地に白い文字の看板とが目印の「キャロット」の店内に入る。「いらっしゃいませーっ!レストラン・キャロットへようこそ〜」ウェイトレスの案内で奥へ進み席についた。

「では、ご注文はいかがいたしましょう?」「私はハンバーグステーキ定食で」「パンにいたしましょうか、ご飯にいたしましょうか?」「ではパンで…」「かしこまりました。お連れ様はいかがいたしましょう?」「うーん、じゃあ、和風ハンバーグステーキデミグラスソース煮定食」

これは名前の通り、和風ハンバーグに、何故かデミグラスソースをのせて、和風の雰囲気を出しにしている素晴らしいセットだ。

「…浩平…そんな変なもの食べるの?」「ああ、悪いか?」「いや…」「お客様、パンとご飯、どちらにいたしましょう?」「パンで…」「かしこまりました。それでは、お飲み物はいかがなさいますか?」「じゃあ、ビールくれ」「かしこまりましたあ!」

……お酒は二十歳になってから!

「かしこまりました。それでは、お飲み物はいかがなさいますか?」「…あれ?」
俺、今、ちゃんと頼んだはずなんだが…。

「コーラとウーロン茶、オレンジジュース、あずきオーレ、タヒボドリンクがあります」

…すごくマニアックな店だ…。普通、タヒボドリンクは置いてない。タヒボドリンクも魅力的ではあるが、やはりここは…

「じゃあ、ビール！」

…だから、お酒は二十歳になってからっ！

「かしこまりました。それでは、お飲み物はいかがなさいますか？」「……………」
「コーラとウーロン茶、オレンジジュース、あずきオーレ、タヒボドリンクがあります」

うーむ…。何か納得いかんなあ…。けど、これじゃ先に進まないし…。

「じゃあ、あずきオーレ」「かしこまりましたあ。お飲み物はいつお持ちいたしましょうか？」「先にくれ」「かしこまりましたあ。お連れ様はいかがいたしますか？」「私はウーロン茶。先にお願ひします」「かしこまりましたあ」「あ、あと、ビールを…」

…はい、お約束。

「かしこまりました。それでは、お飲み物はいかがなさいますか？」「あずきオーレ。料理より先に持ってきて」「私はウーロン茶。料理より先にお願ひします」「かしこまりましたあ」「あ、あと…」

…同じギャグは3度まで！

「いえ、なんでもないです…ぐすっ…」

まあ、こんな感じで晩ご飯は楽しく(?) 瑞佳ととったのだった。

[2月13日・日曜日]

カシャアツ！

「ほら～、起きなさいよ～っ！」

耳障りな音と共に視界が白くなる。まぶしい。そうか、朝か。……………。……………。眠い。やっぱり眠い。

ガバアツ！

布団を取られた。だが、これくらいは慣れたものだ。瑞佳は俺を甘く見ているようだ。それくらいで起きる俺じゃない。当然、体を丸めて対抗する。

…。……………。ぐーっ。

バフッ！

おっ、今度は布団をかぶせてきたか。しかもその上に瑞佳が乗っかってきているから重たいんだ。確か数日前にもこんなことされたような…。やっぱり息苦しいし暑い。

「ぐわあっ、ぐおっ。…。…………。ぶわあああっ」

俺は二度目ともなると慣れたもので、楽々上から押し付けられていた布団をはねのけ、飛び起きる。

「ふう～、やっと起きたね」「あと30分～っ!」「ダメだよ、今寝たら浩平は

遅刻するもん」「大丈夫だって、俺を信じられないのか?」「確か2週間前にそんなことって12時半まで寝て遅刻しなかったかなあ?」「そんな昔のことなんて覚えてない」「浩平の昔っていつなんだよ」「3分前」「…そんな冗談言っとうするの」「だいたいなあ、お前、起こし方もワンパターンだぞ」「だったらどうやって起こして欲しいの」「やっぱりメイド服を来て『ご主人様、朝でございます』とか言って…。それは男の永遠の憧れなんだぞっ」「浩平ってそんな趣味があったの?」「あ、いや、冗談だ。だが、上に布団をかぶせるのはやめてくれ。暑い」「そうしないと起きないじゃないの」「だったら布団をかぶせずに瑞佳が乗っかってくれ」「なんで?」「そりゃなあ…」

瑞佳が、俺の考えていることを察したか、顔を赤らめて下を向いた。

「嫌だよ…」

ふっ、勝ったな。得意顔で胸をはって見せる。しかし、しばらくしてから、「でも、浩平が絶対に素直にすぐに起きるんだったら考えておくよ」

…。いや、そう正直に反応されても困る。仕方ない。

「いや、冗談だよ」「もうっ! からかわないでよ」「かわいそうだから今日はさっさと着替えてやろう」

俺は制服と鞆を片手に部屋を後にした。台所に行ってはみたがやはり誰もいない。秋子さんはもう会社に行ったらしい。今日も、秋子さんが玄関にいた俺のことを瑞佳に頼んだんだらう。そして、今日の朝食を見てみると…おや? 食卓の上には何も無い。あるべきはずのものが無い。それが現実的ではない違和感として体を捉えた。朝食が食卓の上に用意されていないだけでそこまでのことを思うものだろうか。秋子さんだって忙しい。これくらいのことで責め立てては申し訳ないくらいだ。だけど、今現実的に俺が感じてしまっているこの違和感は何なんだろう…。よくわからない。だけど、何か引っかかる…。いったいなんなのだろう。この違和感は…。

「よし、準備オッケー。いくぞ、瑞佳」

とりあえず食卓の上に食べるものがなかったし冷蔵庫の中にも食べ物でめばしいものはなかったから朝食は抜きでいいことにした。

「はいはい」

そして、いつものように家を出る。今日は時間が比較的残っているようだ。ならば、と、歩いて行くことにする。いつもは走りぬける風景も、歩いてゆったり行くというのもいいものだ。

「今日は佐々木ゼミの記述模試だね」「ああ」「難しいらしいんだけど大丈夫?」「ああ」「そういえば、もう来年は入試なんだよね」「ああ」「そろそろ志望校を決めないといけないんだよね」「ああ」「浩平、ちゃんと勉強してる?」「ああ」「浩平の行きたい大学ってどこ?」「ああ」「ああ大学なんて学校ないよ?」「ああ」「浩平~! ?」「ああ」「話聞いている?」「ああ」「もうっ…」「ああ」